

「この世への神様の証」 エフェソの信徒への手紙 2:7

ここまで数回にわたり、神様はイエス様をよみがえらせた御力をもって、罪に死んでいた私たちをもよみがえらせ、イエス様と同じ天の王座に着かせてくださったという恵みを語らせていただきました。今日の7節には、その父なる神の恵み、慈しみが何のためであるかが記されています。

「その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。」

今の世において、私たちが罪赦され、神の恵みの中に生かされているというのは大きな証です。しかし、なんと、その恵みを「来るべき世に」現そうとされたというのです。

来たるべき世とは何でしょう。(図参照)

クリスチャンは、二度生まれ一度死ぬと言われます。一度目は母の胎より生まれ、二度目はバプテスマによって新しく霊的に生まれ、そして、肉体の命の死を迎えるのです。その後は、パラダイスで再臨の時を待ち、主の再臨の時、栄光の体に復活し、神の裁きの座に着くのです。そしてクリスチャンは、神によって再創造された新天新地にて、永遠に主をほめたたえ、礼拝を捧げます。つまり「来るべき世」とは、「新天新地」を指しています。

そこには罪がないのですから、争いも苦しみも、病も落ち込むこともない、神の栄光に満ちた世界です。毎日、喜びと感謝にあふれ、神を礼拝するのです。

礼拝とは本来そういうものではないでしょうか。決して義務や習慣ではありません。死んでいた私を生かし、イエス様と共に天の王座に着かせてくださった神に対して、感謝があふれてあふれて、それが礼拝へとつながっていくのです。それは日曜日だけではなく、365日毎日が、神を礼拝する時となるのです。

日曜日に教会に集うのも、神の民として、一つの体として、心合わせて神に感謝の礼拝をささげるためなのです。

フィリピ2:10, 11には「こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、イエス・キリストは主であると公に宣べて、父である神をたたえるので

す。」とあるように、イエス様が十字架にかかってくださったことにより、私たちは罪赦され、神の子とされ、永遠のいのちが与えられた、この素晴らしい恵みに感謝して、すべてのものがひざまずいて、父なる神をほめたたえるのです。

クリスチャンであるなら誰もが神に喜ばれる歩みをしたいと願います。しかしそれ以上に、まず私たちが、この素晴らしい神を喜ぶ者となろうではありませんか。日々の生活の中で、神を喜びましょう。クリスチャンだって試練や苦難は通ります。しかし、八方塞がりの状態になった時、私たちには天が開いているのではありませんか。いつでも神のもとに行くことができ、神は私の明日を約束をもって導いてくださっているのです。私たちを愛し、ひとり子を十字架にかけてまで、私たちに愛を示してくださった神様を喜ぶのです。そして、神様ご自身も、私たちのことを喜んでくださっています。このことこそが、今の世に、そして来るべき世に、神様が立ててくださった証なのです。

毎日の生活の中で、神を喜び、神に感謝しようではありませんか。死んでいた私が生かされ、神がいつも共にいてくださるといふ恵みの中に置かれ、死をも恐れず、やがて来るべき世において、栄光の体をもって神を毎日礼拝するものとされるのです。こんな素晴らしい恵みの中に置かれていることに目を止め、ハレルヤ！と主をほめたたえましょう。

